

少年芥川龍之介

赤井嶽男

生には頗る氣に入らなかつた。

つたに拘らずその答案は先

妹への……?

怪訝な顔付になつた。

何事も聞かれてゐない

だらしく「雲などは何處が

美しい? 象も唯大きばか

りやうがないか!」

とたしなめ上その答案

が大正五年頃につ

りやうがない。

穂島は、ついに腰を下見だ。

はじめて穂島はち江の本

に行きさうなのに、肚の底

心がわかつた気がした。

閣下には、何かと御厚恩に

つかり醒めてしまつた。

おれを厭ふてゐるのだと

頗いた。だから穂介には

しひれるやうな快よさで。

身も心も和んでゐた穂介。

「いへ、わかつた、わかつ

あらためて君に頼まう、肯

してくれるか?」

はじめて穂島はち江の本

に行きさうなのに、肚の底

心がわかつた気がした。

穂島は戸亭へ連へ込んだ

頗かつてゐるわたしでござ

ります」

その言葉に、穂島は、満

足さうな目になつた。

穂介のこゝろは、すやす

りだから、それだけでは判

りやうがない。

穂介のこゝろは、すやす

りだから、それだけでは判

りやうがない。

穂島は、ついに腰を下見だ。

じめのものと、彼が昭和二年の夏備

行なつた――に就て、彼

は、穂介の心を前にと一緒

に、彼が昭和二年の夏備

行なつた――に

全從業員協力して

労務資源強化運動

入山の新企画刮目さる

地方各炭礦の人不足は度量

の如きが今度緊急に於り、

季節的出兵される歸村續出

、拍車され、愈々深淵の度

を加へ、船炭一千名入山

千五百名、古河千名等所謂

三大炭礦をはじめ爾後の各

方面を通算する差違補充を要する數が實に約六千

名に上つてゐるが、求人

焦慮に反比例する希望者

拂底依然として続後増産

計畫、多大な行き留みを成

じつある處へ縣下各駅

業紹介所は之の間の斡旋緩和に就て常、最大能を發の檄を松原自治會長の名で揮しつづかると謂へば開港場の種の機關のもの打開の事か出まぬし情勢にてゐる

經國の一大講演

午後二時から公開

種々の都合で昨年來延び

言質を得て平市の放送局説教問題につき市では更に青

會式、明治、大正、昭和三市外委員一同が十九日代一亘の世界的な文豪泰富翁を迎へる

翁を迎へるよ明十八日の日曜を以て午後一時から市公

會堂に於て舉行される

翁は今や七日午後八時五十分卒業者住吉屋本店

十六分卒業者住吉屋本店

で宿舎に引き上げ定刻前記發式に臨み式後

熱望した時局下に於ける經國渾然なる運がをはかる吏員の充實に關する制當の查定が右は單に員ののみならず大衆の爲に公開し長期戰下の警醒に資する事になつてゐる

放送局誘致青沼市長ら上京

仙台放送局に陳情し有難い

十一名	網打盡
十六	坑道三絕正木森之助(音)
十七	酒井字出食料理業小坂巳之助(音)に開拓
十八	吉方莫慶雲で大日本炭々夫
十九	日午後九時半頃勿寒屋大字外名が現金賄博開拓植田

市内を三方部に

十九日大綱を決定

青年團改組案成

廿一日未満の者と最も圓負

既報、平職業紹介所の今年時から市内住吉屋本店に開

小學卒業児の就職就業促進

既報、平職業紹介所の今年時から市内住吉屋本店に開

つとも共	経節
五〇瓦中一ヶ	一〇、三瓦
一枚	一枚
一瓦	一瓦
二瓦	二瓦

卵	油
五〇瓦中一ヶ	一枚
一枚	一枚
一枚	一枚
一枚	一枚

五〇瓦中一ヶ	一枚
一枚	一枚

五〇瓦中一ヶ	一枚
一枚	一枚

十一名網打盡十六坑道三絕正木森之助(音)廿二七〇鹿島一高久二八八二七〇植田一上下小川一三三三二八八二八八二七〇吉方莫慶雲で大日本炭々夫

日午後九時半頃勿寒屋大字外名が現金賄博開拓植田

酒井字出食料理業小坂巳之助(音)に開拓

吉方莫慶雲で大日本炭々夫

日午後九時半頃勿寒屋大字外名が現金賄博開拓植田

酒井字出食料理業小坂巳之助(音)に開拓